九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

仮定表現に関する日中対照研究 : 機能拡張および文法化の観点を中心として

李, 慧

https://hdl.handle.net/2324/7329395

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（学術）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

（様式６－２）

氏　　名	李 慧
論　文　名	仮定表現に関する日中対照研究―機能拡張および文法化の観点を中心として―
論文調査委員	主　査　九州大学　教授　大津 隆広 副　査　日本大学　教授　井上 優 副　査　名古屋大学　教授　杉村 泰 副　査　九州大学　名誉教授　大橋 浩 副　査　大阪大学　准教授　劉 驫

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

I. 論文内容の説明（要旨）

本論文は、日本語のいわゆる仮定表現「ば」「たら」「なら」と中国語の仮定表現“如果”、“要是”、“的话”を中心に、機能拡張や文法化の観点から、それらの類似点・相違点およびその語用論要因について、言語コーパスを用いて行なった実証的な対照研究である。

日本語の「ば」「たら」「なら」のような仮定関係を表す表現は、非仮定的用法からの発達と見なすことができるが、その過程で終助詞的機能、接続詞的機能が発達していると考えられる。一方、中国語の仮定関係を表す“如果”、“要是”、“的话”などの機能拡張は、非接続表現が接続関係を表すプロセスであると言える。この特徴により、中国語では、仮定表現の出現状況や文中の位置関係などの差異によって「仮定表現」(仮定関係を表す表現)、「準仮定表現」(他の品詞から転じ、仮定関係を表すとともに他の意味を表す表現)、「次仮定表現」(仮定関係も表すが他の意味を中心とする表現) の３つに類別することができる。日中両言語における仮定表現の機能拡張のプロセスについては、小柳(2018) の文法化と多機能化の議論に基づくと、非対称的であると言える。日本語の仮定表現は終助詞的機能から接続詞的機能へ、一方、中国語の仮定表現は非接続表現が接続関係を表す仮定表現としての機能を担い、出現のコンテクストや統語的位置などにより仮定の意味や機能が異なる。

文法化理論は、日中両言語における指示詞や助詞と仮定表現の融合形式についての対照研究においても有効である。指示詞と仮定表現の融合形式においては、日本語の「そうしたら」「それなら」と「そしたら」、中国語の“那” と “那么”における指示機能と接続機能の強さの違いが説明できる。また助詞との融合形式である日本語「(の) なら」と中国語 “的话” それぞれの文法化プロセスも明確になる。

以上のように、日本語と中国語は異なる文法化の類型に属していると考えられるため、日本語では非仮定から仮定の機能を持つ表現へ、中国語では非接続から接続関係を表す仮定表現へ機能が拡張すると言える。また、異なる文法化の類型としての両言語が似たような文法化プロセスを経ていることから考えると、構文上の類似性が文法化の誘因の一つであると考えられる。さらに、もう一つの誘因は融合であり、融合を介して複文における仮定表現の機能が弱くなり、他の機能へ拡張されるととも

に、もとの複文の形が崩れて脱文 (節) 化しているとも考えられる。

II. 学位を授与するに値する理由

本論文が学位の授与に値する理由は次の３点にまとめることができる。まず、言語研究としての包括性および言語データの網羅性である。日本語と中国語の仮定表現に関するこれまでの研究では、文献の多さ、扱う言語データの多様さなどから包括的に行われておらず、日中両言語の仮定表現の意味や用法の分類、列挙に留まっていた。それ対して、本論文では、非常に多くの先行研究に対する徹底した調査と分析を行い、機能拡張や文法化という言語学的枠組みを用いて多様なデータを整理しなおし、両言語の仮定表現の類似点と相違点、およびそれを生じさせる語用論的要因について理論的に対照研究を行なっている。

また、文法化理論を仮定表現の融合形式にまで適用し、分析を行なっている点も高く評価できる。日中両言語の典型的な仮定表現のみならず、これまでのさまざまな通時的研究をもとに、指示詞と仮定表現の融合形式、助詞と仮定表現の融合形式の文法化にまで議論を踏み込んでいる。前者に関しては、「そうしたら」「そしたら」と“那”と“那么”の対照研究である。「そしたら」は「そうしたら」に比べて短縮化により指示機能が弱まり、一方、指示機能と接続機能をもつ“那”と“那么”においては、“那”自体が本来指示機能と接続機能を有しているため、“那么”では接続機能が強化されると言える。また、後者においては、「なら」構文と“如果”構文、「のなら」構文と“如果(说)……的话，……”構文の意味と機能が類似していることが主張されている。

最後に、日中両言語の仮定表現の機能拡張のプロセスが非対称であるという考察結果も学術的に優れた点である。日本語の仮定表現が仮定から非仮定の機能へと拡張されるのに対して、中国語では、非仮定の機能を持つ接続表現が仮定へと拡張された機能を担うという言語データで実証した主張は説得力がある。また、日中両言語の仮定表現の文法化の違いが異なる類型によるものであるという指摘は本論文の学問的意義であり、言語研究としてのスケールの大きさを示すものでもある。日中両言語の仮定表現の文法化について対照研究を行うことを通して解明された両言語特有の類型の議論は、本論文が同時に言語類型論的研究でもあることを証明している。

以上のことより、李慧氏の論文を博士（学術）の学位に値すると認める。